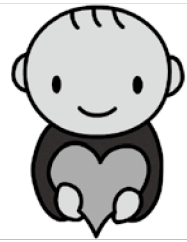


いっしょらぼ

いっしょらぼの「ボランティア」



スクールサポーター
(臨床心理士)
小林 真理

いっしょらぼ

「ボランティア」

「ボランティア」

「最近、あの子、明るくなったよね。主人と家で話しているんです」「話してくれたのは、特別支援学級に通う子どもをもつお母さんです。」

この子どもは学校や家庭、友達とのやり取りの中でも、わがなくて不安になってしまったり、「どうするの?」と追られると泣いて固まってしまったりが多かった子どもです。周りは本人を責めているつもりや、せかしているつもりは全くないのですが、本人としてはそう捉えてしまい、悲しくなったり、どうしたらいいかわからなくなってしまうといったようです。

ある時、本人と家族は「週に1回、1時間、地域のボランティアの人のサポートを受けながら、

地域の企業で「お仕事体験」を半年間続ける」という活動に出会い、この活動に参加することを決めました。とはいえ当初、家族では「できるのか」「大丈夫か」「迷惑をおかけしてしまうのではないかと心配そうに送りだす様子もありました。本人はもちろんです、ボランティアの人も受け入れ企業も、それぞれが「できるかな」「何をすればいいのか」と緊張している様子が伝わってきました。

この活動には月に1度、関わる全ての人が参加し、それぞれの活動を報告する会があります。はじめのころ、本人が感想を言う時などは、蚊の鳴くような声で「〇〇をして楽しかったです」と自信のなさ伝わってくるようでした。しかしそんな本人の自信のなさとは裏腹にボランティアや受け入れ企業の方は、いきいきと嬉しそうに「本当にいろいろなことができる」「声をかけられるとちゃんと応えている」「一生懸命頑張っている」「根気がある」と参加者全員の気持ちがあたたかく元気になるような報告をしてくれます。

この活動が続き、報告会も回数を重ねるにつれ、本人の声も大きく表情も明るくなり、ボラ

ンティアや受け入れ企業からの嬉しい報告も積み重なり、家族からも「安心して活動に送り出せるようになった」「この活動を始めてから、いいことが3つあった。①自分からあいさつができるようになった、②掃除などで細かい所に気がつくようになった、③集中力がついたと成長が報告されるようになりました。こうしたことから、それぞれの表情がやわらかくなり、笑顔が増え、ちょっとした関わりの中でも、お互いに楽しそうに語り合ったり、つながりが増えていきます。

この活動では誰かが特別なことをしているわけではありませんが、それぞれが自分たちの暮らす地域で、できることをできる限りでやっているだけなのです。そしてその中で、それぞれが成長しています。障がいのある・なしに関わらず「できることをやる」「こころ自体が私たちそれぞれの気持ちを支え合っているのではないのでしょうか。」

「最近、明るくなったよね」「この言葉のパワーがそれぞれの元気の源になり、それぞれの「できることをやる」が広がっていくといいですね。」

軽井沢町人権講座

日本理化学工業 会長 大山泰弘 氏 講演会

知的障がい者に導かれた企業経営から 皆働社会実現への提言

と き 2月18日(火) 15時～
ところ 中央公民館 講義室
主 催 町教育委員会・軽井沢町商工会
軽井沢町企業機会均等推進協議会

「働く」とは、人に必要とされ、人の役に立つこと。
そのために一生懸命頑張れば、みんなに応援してもらえる。
このことを知的障がい者に教えてもらったのです。
大山泰弘 著「働く幸せ」より

日本理化学工業は全従業員74人中55人が知的障がい者(内26人がIQ50以下の重度の障がい者)が働いている、学校で使うチョーク製造を主とした会社です。

このような障がい者の多数雇用を目指したのは、禅寺のお坊さんからのある言葉でした。



大山泰弘 氏

【問い合わせ】 生涯学習係 ☎45-8695